

## 漫画としての「一休話」

— 1945年～1959年

福井直秀

### 〈概要〉

一休宗純の死後作られた多くの「一休話」のうち、第二次世界大戦後しばらくの時期は、漫画という形式で発表される作品が多かった。そこで、これらを1945年から1949年の時期＝前期と、1953年から1959年の時期＝後期に分けて論じた。

漫画という形式は自由な表現方法が可能のため、「一休話」の新しい展開がなされた。前期は実際の作者が誰かについて分からない点などの謎はあるが、従来の「一休話」に捕われない内容でストーリーが進められるなどの斬新さが目立った。後期については、3つに分けて考えた。まず福井英一の「頓休さん」である。これは、雰囲気はいかにも一休だが、名前を異にする小僧が主人公の物語で、ストーリーはそれまでの「一休話」とは無縁な失敗話を中心となっている。これを「一休話」の範疇に入れられると措定した。

またこの時代は、伝記読み物が盛んになり、一休その人も伝記として扱われる対象となった。このため、一休の伝記が漫画で表されることにもなった。ここでは、どうしても一休を顕彰する必要があるため、「偉さ」の強調は避けられないが、漫画ゆえの「ずっこけた」表現も見られた。さらには、前期の「一休話」を継承した作品も存在した。

以上、通してみるに、戦後期の漫画表現としての「一休話」は、「一休話」の全史の中でいささか「浮いた」存在であった。ストーリーやギャグの性質の面で、それまでの「一休話」に依拠しない様々な表現がなされた。だが、これらの自由さは、「一休話」に関しては、ここで取りあげた時期に限られるようである。

### はじめに

一休宗純（1394年～1481年）はその頓知話で有名だが、それらは彼の死後、1668年に作られた『一休ばなし』を筆頭とする説話集、そして以後様々に改作、あるいは付加された数百に及ぶ一休物語（これらをここでは、「一休話」と総称する）から成り立っている。

私は、これまでこれらの「一休話」の研究を進めてきた。そのうちの成果の一部をかつて「子ども向き読み物における『一休』——一九四五年～一九七五年を中心に」<sup>1)</sup>で発表した。ここでは、「一休話」は戦後しばらくの時期、漫画として出版されたものが代表的だったということを紹介した。ただ、漫画としての「一休話」は、枚数制限のために詳しく論じることは出来なかった。また、その後の調査で付け加えるべき、あるいは改変すべき論点などを見出した。

以上のような事情から、ここに漫画としての「一休話」を取り上げて論じるのである。

本稿では2章に分けた。第1章は1945年から1949年までである。この時期は、もちろん既成

の頓知話に依拠するところもあるが、一休がかなり自由に活躍しているという意味で特筆すべきである。14冊を取り上げる。

第2章は少し期間が空いて、1953年から1959年を対象とする。なお、3年間程の空白の時期の理由は後で述べる。この時期は、既に他の作品で人気を博していた福井英一の登場、および伝記の流行等により、漫画の「一休話」が大きく変化を遂げるため、これを取り上げて論じるのである。

第1節で福井英一作品を、第2節で伝記漫画としての「一休話」を、第3節で伝記漫画と表示されていない「一休話」を取り上げ検討する。なお、福井の作品は「一休」とは表記されていないが、「一休話」の一つとして扱う。その理由は後で述べる。

漫画という形式はいろいろな新しい表現を可能にする。いや、新しい表現に誘うと言った方がいいかもしれない。たとえば、それまでの絵物語という形式は、ページの半分ほどを絵に裂くことで量的には絵の要素が大きくなるが、静止しているので挿絵とほとんど変わらない。ところがコマ割を使う漫画は、それぞれの場面で、登場人物の表情、汗、涙等々も描けるため多くの情報をそこに込めることが出来る。さらに、当時、すでに田川水泡は漫画に新形式を導入していた。竹内一郎は次のものを挙げる。

「歩いた後の砂煙。吹き出しの丸み。背景の丹念な描き込み。劇中人物のワク外へのはみ出し。ワクとワクの間の飾りケイ」<sup>2)</sup>

このような可能性を携えて、戦後早々漫画「一休話」が登場したのである。

## 1 1945年から1949年の漫画本「一休話」

### (1) 作者不詳『頓智一休』

検討対象を1945年7月30日発行の作者不詳『頓智一休』<sup>3)</sup>(鳥田書店)から始める。これは戦争中の発売であって、戦後作品と同様に扱えるかという疑問が生じよう。だが、この戦争末期に書かれた作品は、後で見るように実は内容がそのまま戦後に出版されているのである。一休については、戦争の終結という区切りはそれほど大きな意味を持たなかったようである。

この作品は重要な問題を抱えている。それは、作者が誰かという問題である。国立国会図書館によれば、発行年も作者も不詳とされてきた。だが、実は裏表紙に極小さな奥付が印刷されているのである。活字がかなりつぶれているのと紙質も悪いため判読が難しい文字も多いが、発行は昭和20年7月30日、価格1円50銭、購売房・鳥田書店、そして図(?)作兼発行者・鳥田義夫(次?)と読める。作者兼出版社の形で鳥田義夫(次?)という人物が出版したことが確認できるのである。

作品の特徴は次のようなものである。一休が入門して兄弟子から経を習うが、それがナムアミ

ダブツという7文字だけだったり、朝起きて小僧たちが布団を積んででんぐり返りをして遊ぶなど、厳しい修行ではなくいい加減な生活として描かれる。

頓知は2つ登場する。1つは、それまでの「一休話」に取り上げられたもので、息を仏様にかけてはいけないのでお燈明を口で消すなどと言われて、後ろ向きに経を読む話である。これについては、和尚が「シマッタ！」と言って降参する様子が描かれている。2つ目は、「一休話」とは別の頓知話で、ネズミの彫り物の優劣を競うとき、猫に判定させるが、そのために鱧節でネズミを作って勝利するというものである。

他方、一休の工夫が失敗となる話もある。廊下掃除を簡単にしようと蠟を塗るが、和尚が転んでこぶを作るという落ちとなっている。

その他、ギャグ漫画らしい点としては、次のようなものがある。一休が高い木に登っている間におやつの時間となり、他の小僧は食べてしまう。一休が下りてきたときおやつの内容を聞くと「タクアンとおちゃだよ」<sup>4)</sup>と言われて「いらない」という場面、石につまづいてそれを取り除こうとどンドン掘っていくと小判が出てくる事件である。

以上、頓知を掲げつつも、その強調ではなく、ドタバタの色彩の強いギャグ漫画となっている。

## (2) 伊藤和三郎『一休さん』

この作品は1946年4月1日、玩画社の発行である。「ぼくが有名な一休小僧でござる。これからぼくの活躍を見てくだされ」<sup>5)</sup>との、威張った感じで始まる。内容は、頓知話4編でいずれも有名な「皮を着るべからず」、「はしを渡るべからず」、「ふたを取らずに食べる」、「毒と言われた飴をなめる」である。最後は、「ぼくが後に一休禅師になってますます知恵を磨きました」で終わる。

一休の偉さを打ち出している点にわずかな特徴が認められるが、伝統的な頓知話に依拠しただけの作品となっている。

## (3) 青木スエヲ『一休サン』

この作品は、1946年12月25日、新生閣の発行だが、前半部はかなりのものを先の島田義夫(次?)『頓智一休』から拝借している点に特徴がある。後半部は全く新しい展開となっている。

『頓智一休』の使い回しの部分としては、「兄弟子から経を習う」、「廊下に蠟を塗り和尚が転ぶ」、「タクアンとお茶のおやつは要らない」、「布団ででんぐり返り」などが見出される。「おやつ」は、そのまま使われ、その他はギャグを増そうとの工夫がされている。たとえば「経を習う」は、兄弟子に一休が経を教えてもらうために飴玉をあげ、兄弟子は飴をなめながら経を読み飴玉を吐き出してしまう。また有名な「虎をしぼる」では、殿様に会うとき、なぞなぞを出題されて見事に答える場面を付け加えるというように改変されている。

さらには次のようなドタバタの要素もある。皆で経を読んでいるとねずみが和尚の着物の袖に入ってしまう。それを小僧たち皆で追いかけ、お互いがぶつかったたんこぶを作ることになる。

漫画の特性を生かした笑いも作られている。小僧たちが蚊帳で遊んで最後は蚊帳から身を出して寝てしまう。そこへ和尚が来て、「みんな寝相が悪いね。寝冷えでもしたら大変だ」<sup>6)</sup>と皆に布団をまいてしばってしまう。朝になると、小僧たちは「もう悪戯はしませんから許してください」、和尚は「やや！ 解いてやるのを忘れていたわい」との吹き出しとなるが、どちらの頭の上にも大きな「？」が付いている。

既成の「一休話」を利用しながら、創作の部分を膨らませようとの意図の上に成り立っていた。

#### (4) カタビラ ススム『一休サン』

1947年2月25日にミハル社から出されたこの作品は、後半が別の作品「文福茶釜」となっていて、一休はわずか10ページしかないが、「またおしょうさんにしかられちゃった」<sup>7)</sup>との発言に見られるように、一休がいたずら小僧として描かれている点と、頓知話は和尚さんが困っているのを一休が助けるという設定になっている。ジンベエがネズミの置物を売りに来るのを鯉節のネズミを作って阻止する、あるいは、「皮を着たもの入るな」という話も、和尚がジンベエが毎日来て困るというのを聞いて、考えたものとなっている。

極めて短い、いたずら者ではあるが、和尚に頼られる一休像を描いている。

#### (5) 青木末雄・斎藤邦雄『頓智一休』

この作品は、(1)の『頓智一休』と全く同じものである。この理由については、この後青木・斎藤の他の作品を取り上げるので、そこで考察する。

#### (6) 竹之内米太郎『一休サンの大笑ひ』

この作品は1947年4月20日に八千代書院から出版された。奥付は小さなつぶれた活字が使われ、判読が難しい点もあるが、竹之内は図(?)作兼発行者となっている。「バチガアタル」, 「美味しい柿」, 「遠足」, 「飴事件」, 「一休さんの失敗の巻」, 「かくれんぼ」, 「朝の散歩」の7話からなる。

「バチガアタル」, 「飴事件」は、有名な一休話が基になっているが、その他は、作者の創作である。その内、際立つ「一休さんの失敗の巻」を紹介する。

一休は、誤って和尚の大事にしている鉢植えの花を折ってしまう。そこで、蟹を捕まえてきてそのせいにするが、通じない。和尚に「ばかをいふな かにのはさみできれやうがないじゃないか、一休！ おまへがやったのだらう」と叱られる。全体として、ドタバタが目立ち、頓知は影が薄い。

なお、この作品は、毛皮屋が登場すると、突然殿様に褒められるシーンに飛ぶ。この理由として2つ考えられる。1つは落丁である。この頃正確な本を作りという意識が低かったので、大いにありうる。

もう一つは検閲の可能性である。殿様が登場するシーンでは、(8)で詳述する鎌倉街道、すなわ

ち刀を抜くシーンが考えられる。竹内一郎『手塚治虫＝ストーリーマンガの起源』によると、「出版物は検閲され、少年読み物においても仇討ち、チャンバラなど日本的心性に訴える作品は禁止されていた」<sup>8)</sup>とされる。

他方、夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』の宮本大人執筆部によると「少年少女雑誌でも、時代劇は刀を抜かないのが原則だったが、赤本マンガではこの時期すでにチャンバラ描写がごく普通に見られる。GHQの検閲の基準が赤本マンガに対しては厳しくなかったということだろうか」<sup>9)</sup>という見解もある。

この頃の検閲の実態について論じた山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』<sup>10)</sup>によると、検閲の通過について、事前検閲の場合は passed あるいは pre-censored and passed, 事後検閲の場合は approved あるいは post-censored and passed と記されるとのことだが、この本の場合、Censor Pass Stamp とあるだけなので、検閲に引っ掛かったかどうかは分からない。ただ、作者や出版社の側が自己規制した可能性もある。この著について検閲が具体的にどうだったかは、さらなる調査が必要である。

#### (7) 根岸こみち『頓知くらべ一休さん』

この作品は、1947年6月25日、冒険講談社から出版されている。作者からのメッセージとして「一休さんの子供時代を漫画にしました」<sup>11)</sup>とあるが、実際は「一休話」の大人になってからの頓知話はいくつかあり、一休を子どもと設定しただけであることが分かる。もちろん、元々多くの「一休話」が作られる過程で、一休の少年時代と成人後の頓知を分けてきた歴史があるだけなので、目くじら立てるほどのことではない。

独創的な点を挙げる。虎の屏風と仙人の描かれた屏風を並べ、仙人は虎を怖いと言っているかと問う竹斎に対して、一休が「はい、えにかいてある人が話すわけがないのに それをきいてみるというちくさいは ばかものだと申しました」<sup>12)</sup>とやり込める話、竹斎が一休に土産として、火をあげようという、線香を差し出して「では おせんこうのお火にいただいて ほとけさまえ おそなえしましょう」<sup>13)</sup>と切り返す話などが該当する。

全体として、「一休話」をいくつか取り上げその内のいくつかを改作して紹介するものとなっている。

#### (8) 清原ひとし『一休さん』

この作品は、1948年1月25日新生閣から出版されている。

既成の頓知話をいくらか生意気な方向で改変する方法で、一休は平然と大人たちに向かっている。たとえば、「鎌倉街道」という一休話が改変されている。

元々「鎌倉街道」は次のような話である<sup>14)</sup>。出された魚を食べた一休が、主人から「食べてはいけないのではないかと問い詰められて、「私の口は鎌倉街道、どんな人も通る」と答える。すると主人は「ならば、このような者も通るだろう」と刀を突き付ける。一休は、「敵か味方

か」と問う。主人が「敵」と答えれば、「通せない」と答える。「ならば、味方だ」と答えると、  
咳払いをして「曲者が通るから、今関<sup>せき</sup>が出来た」と答える。

改作は次のとおりである。「とのさまと一休さん」という小題の5コマで表されている。1コマ目：和尚「これこれ一休や とのさまだぞ あたまをさげなさい」、一休「まだ何もいただきません」、2コマ目：との「一休とやらそちは 何がすきか」、一休「いただくものなら どんなものでも 大すきです」、3コマ目：との「それではこの刀をつかわすぞ さア たべて見ようじゃ どうじゃ どうじゃ」と、刀を抜いて突き付ける。4コマ目：一休：「けっこうなものでございますいまはおなかが一ぱいですから いただいて うちに」、5コマ目：一休、刀を鞘に収めて「かえってから ゆっくりといただきます はい さようなら」

清原の『一休さん』では、まだ何ももらってないのに頭を下げる必要がない、であるとか、最後に自分から「はいさようなら」と有無を言わず話を終わらせるなど、大人をどちらかという<sup>と</sup>馬鹿にするような「子ども一休」となっている。奇抜な子供像を提示することで面白さを増進させたと言えよう。

#### (9) 青木末男『一休さんの大笑ひ』

1948年2月20日に八千代書院から出されたこの作品を巡って検討すべきことがある。まず、作者は青木末男とされているが、青木末雄の誤植と考えていいであろう。

次に先行書との関係である。1945年7月の『頓智一休』は、そのまま1947年3月、青木末雄と斎藤邦雄の合作として同名で出版されたのである。わずかに異なる点は、青木・斎藤版が最後のページに「シシノカハラキタロバ」という話の冒頭を付け加えているのと、印刷の違いから特に緑色がにじんんでいる箇所が見られるという2点のみである。

この理由として予想される経緯は、戦後の混乱期に版が他人の手に渡り、作者名を変えて出版されたというのが一番あり得そうである。特に漫画は高い価値が認められていなかったので、著作権も極めて軽かったからである<sup>15)</sup>。この間に青木は、1946年12月、『一休サン』を出す<sup>が</sup>、これは『頓智一休』そのままの部分やよく似た箇所が採用され、それに別の発想からの新作を付け加えたものとなっていた。

『頓智一休』は、さらに奇怪な歴史を歩む。すでにみたように1947年4月竹之内米太郎は、『一休サンの大爆笑』を出していたが、同名の本『一休さんの大笑ひ』が1948年2月20日に、青木末雄作として出版される。

ところが、この本の内容は、驚くべきことに、元々他人から拝借(?)してきた『頓智一休』を前半に、竹之内の『一休サンの大爆笑』を後半にしてくっつけただけのものなのである。『頓智一休』との違いは、元々多色刷りだったのが、単色刷りになっただけである。

以上のようにして成り立っている<sup>ので</sup>、絵を見ても、前半と後半は明らかに異なっている。だが、気を付けて見ないと差異が分からない程度なので、竹之内版『一休サンの大爆笑』は、島田の『頓智一休』をまねて描いたと考えられる。

ところで、青木の『一休さんの大笑ひ』は、八千代書院から出版されている。この出版社は竹之内が経営するものである。となると、青木が竹之内を盗んだという関係ではないことになる。

では、竹之内米太郎とは何者か。NDL-OPACによると、彼の著作は他には見つからないが、経営する八千代書院は、1946年から48年にかけて単行本8冊、雑誌2種類とかなり精力的に出版活動を行っている。主たる職業が作家ではなく、出版者だと考えられる。作品の描画そのものを竹之内が担当したとは考えにくい。

そこで、斎藤邦雄、青木末雄であることが明らかな他の作品の絵とこれまで登場した作品の絵とを比べてみる。斎藤には1949年『団子山誉れの土俵入』という作品がある。主人公が小僧になるシーンがあるが、これまでのいずれの絵とも似ていない。また、青木は少し時代が下がって1956年に『怒濤の冒険児』などを描いているが、こちらも全く別の描き方である。表1は、同じ描き方を同じアルファベットで表したものである。

竹之内版は本当に竹之内が描いたのか、また実際に描いていないと思われる作品を含めて青木の名前がこのように登場する理由は何か。これには、戦後の占領期という事情が関わっている可能性もある。青木末雄の経歴については、断片的だが、松田ほなみ「紙芝居の描画技法の研究(第2報)——教育紙芝居の名作に着目した描画技法の検討——」<sup>16)</sup>が参考になる。これによれば、青木は第二次世界大戦中に次のような作品を残している。

1944年、高橋五山は戦意高揚用として、紙芝居「金太郎の落下傘部隊(戦意高揚昔話)」、「ウチテシヤママ(決戦幼児文化紙芝居)切抜き貼り絵」、「奴のつかい」を作ったが、青木はその絵を担当していた。青木は、戦後の時期、ある程度の「権威」だったので、監修者のような役割もしていたと考え、一応筋が通る。

NDL-OPAC および松田論文によると、青木の次の作品は10年ほどの時期を置いて登場する。NDL-OPACには1956年からである。この年太平洋文庫から、漫画全集243として先に紹介した『怒濤の冒険児』、同264『巨人毒蛾の面』、同272『大岩窟の鉄人』を出している。なお、その後56年を含む3年間に同シリーズとして同傾向の本を総数9冊出している。また、前掲の松田論文によれば、記録に残るものとして、青木が次に高橋の紙芝居の絵を描くのは1962年の「おやつ 日本紙芝居幻灯」である。

表1. 絵の分類

島田義夫(次?)『頓智一休』	A
青木スエヲ『一休サン』	C
青木末雄・斎藤邦雄『頓智一休』	A
竹之内米太郎『一休サンの大笑ひ』	B
青木末雄『一休さんの大笑ひ』前半	A
青木末雄『一休さんの大笑ひ』後半	B
斎藤邦雄『団子山誉れの土俵入』	D
青木末雄『怒濤の冒険児』	E

では、青木の空白の10年をどう考えればいいのか。一番考えられる理由は、図書館が収集の対象とする本を書かなかったからというものだろう。GHQは、占領期の「安っぽい」漫画・赤本まで検閲の対象としたので、それらが保存された。だが、検閲の終了した時点で、それらの本を保存する公的機関はなかったのである。いずれにしろ、青木を中心とする「一休話」の複雑さは未解明として残る。

#### (10) カタビラ・ススム『一休さんの冒険』

この作品は、1948年2月20日に川津書店から出版されている。構成としては、前半が一休話に依拠し、後半が一休話とはほとんど無縁な冒険譚となっている。冒頭で一休は、かくれんぼしていて鉦の中から出られないという失敗をやらかしてしまう。その後、「灯りを息で消す」、「隣の竹の子の成敗」、「虎をしぼる」と明治以降に付加された「一休話」が続き、その後盗まれた経を探しに旅に出るところから、ストーリーが一変する。

一休は盗人が宝物を隠す場所を見ていたことから、鼻が利くとのふれこみで山賊から経を取り戻すという、昔話に出てくる展開の成功譚で終わる。その間、なぞなぞや迷路などの出題を説いていくことで話をより面白くするというスタイルである。

いったん「一休話」から離れると、とことん離れていくという構成となっている。

#### (11) 石田英助『とんち小僧一休さん』

この作品は、1949年1月20日、鶴書房から出版されている。一休は、「さる尊い人の若君」<sup>17)</sup>の出家として登場する。和尚に命じられたことを自分ではせずに、そのまま他の小僧に伝えるので他の小僧がもてあます。ただ、最後に二人の小坊主がすり鉢で磨りながら「あの一休さんは將軍様より偉い人の若君なんだってさ！」と話しているコマとそのコマの外で、一人の小僧が「てなことを夢中でしゃべってたら すりこぎがこんなにへっちゃった」<sup>18)</sup>と嘆く。これが落ちになっていて、「困った若君」問題はここでは解決しない。だが、次のページになると、一休は高貴さを一切表に出さない普通の小僧として描かれている。漫画特有の変わり身の早さである。

話題としては、小僧・一休として、江戸期・明治以降に作られた様々な「一休話」が取り上げられている。「後ろ向きの経」、「皮入るべからず」、「四十雀の引導」、「はしを渡る」等々である。ここでの特徴は、ギャグを盛り込むため、元の話の適当に変えていることである。

たとえば、殿様から預かった茶碗を割る話は、それまでの一休話では、茶碗より命の大切さを將軍に説くものが多いが、ここではすっかり変えられている。実際割った茶碗は偽物で本物は別においてあったとされ、他の小僧たちに対して次のように一休が言う。「諸君もあの茶碗が本物だったら本当に死刑だよ。だから やさがしなんてこんどから やめるんだ」「では諸君に本物を見せてやるからとあしをしぼってそこをうごいてはいけないよ」。

これに続く最後のコマでは、小僧たちから離れたところに茶碗を置き、一休が「しょくんよつつしんで三国一のお茶碗をよくみなさい\*ぜいたくいってはいかん」(原文に\*印はない)と

言う。これに対して他の小僧が「よくみろといっても そんなにはなれてはよーくみえないよ」と言い返している。なお、これは吹き出しの使い方の失敗で、一休の発言が、\*の前の「よくみなさい」で一度止まり、そこに小僧の発言が来、その後\*以下の「ぜいたくいって」となるのが、論理的時間の経過である。

その他、ふざけた一休像は次の場面でも表されている。四十雀に引導を渡す一休話があるが、それに続いて、一休と依頼主との間で次のような会話が交わされる。

一休「あー もしもしおわずれものです」。依頼者「はてな わしはなにもわずれたおぼえはないが」。一休「あのお鳥目をわずれては こまります」。これを聞いて、依頼主が「うへー まいった 一休さんにはまけたよ がっちりしてるね」と跳び上がり、傍でこれを見ていた小僧も「ありゃ」<sup>19)</sup>と跳び上がっている。

材料は「一休話」から取るが、料理法が漫画的センスという典型的な作品である。

## (12) 石田英助『一休和尚さん』

この作品は1949年2月20日、鶴書房から出版されている。ここでは大人になってからの一休が描かれている。それまでに作られた「一休話」を元にギャグをちりばめようとの意図が鮮明である。そもそも一休禅師が旅に出るが、そのお供が弟子の蛭川ちん左衛門（元は、新右衛門である）という奇妙な名前であることがそれを象徴している。

ギャグの一例として、一休が渡し船の乗客に「とにかく いばるなら 一休さんのような名僧になってからいばるもんじゃ」と説教され、「うへー そそんなもんかね」<sup>20)</sup>と照れて汗を流すシーンが挙げられる。

また、代官の課す不当な年貢に苦しむ百姓のために、領主に手紙を書いて二人に届けさせるという場面では、落語のような展開となっている。

一休の使いと知った侍が二人（田五作と壱兵衛）に向かって聞いていく。39ページ1コマ目：侍「さて さっそくながら 禅師には どこにおいででござる」、二人、ガクガク震えながら、田五作「へい善次でございますか 善次は」、壱兵衛「きょねん よにげしておりませんのでへい」。2コマ目：侍「いやいや てがみの禅師様は」、二人、ブルブルしながら、田五作「いえ使いの者は善次でねーです」、壱兵衛「壱兵衛に田五作でがんす」。3コマ目：侍「ちがうちがう このおてがみのぬしは」、二人、ガクガク震えながら、田五作「あのいけのぬしでがんすか」、壱兵衛「あの主はなんでも鯉か鯰だそうで へい」。40ページ1コマ目：侍「いやはや こまったな ではこのおてがみをおかきになった おぼうさんはどなたで」、二人「へい牛蒡はことしはたいへんなふさくでして」。

結局話が通じないままに終わる。

このようなドタバタが散見されるが、他方、明治期以降の講談に見られたように、一休は有名な僧として心得違いを諷めるところが要所要所に出てくる構成になっている。

## (13) 竹田慎平『一休さん』

この作品は、1949年3月21日、門野書店から出版されている。竹田はこの作品の冒頭で、読者に次のように話しかける。

「ゆかいなおもしろいことを、つぎつぎにする物語皆さんも一休さんのようにげんきなそして良い子供になって下さい」<sup>21)</sup>

構成は、前半の5話が既成の一休話に依拠し、後半の5話は全くそこから離れて展開するというものになっている。一休を「良い子供」と竹田は言うが、実は当たっていない。

寺に上がった頃は、お供えを食べてしまい、和尚の「そんなばちあたりのことすると 口がまがって なんにもたべられなくなるぞ」との脅しを「えっ ほんとうですか」と信じる一面を持っていた（なお、これは「口がまがったかどうか しらべてみよう」と実際に試してみて、嘘を見破っている）が、他方お供えの饅頭を失敬して仏様の口に餡を塗る、木魚を叩きながら踊る、「和尚さんのおきゃくさん いちのわるい人だからいたずらをしてやろうよ」<sup>22)</sup> と言いながら廊下に餡を流すなどいたずら小僧ぶりが発揮されている。

作品の展開は、既成の「一休話」をある程度取り入れているが、特に後半は別の話にしてしまうという特徴を持っている。

## (14) 作者不明『頓智一休さん』

KK出版の『頓智一休さん』（「高級ポケットマンガ」シリーズ）は、全47ページからなり、作者も発行年も不明である。だが、まず、この作品をおよそこの頃と推定する。

理由は、国立国会図書館・国際子ども図書館に依頼した調査<sup>23)</sup>による。同調査によると、KK出版の「高級ポケットマンガ」シリーズは、国立国会図書館のプランゲ文庫マイクロ資料にあるものすべてで13冊あり、いずれも1949年の出版である。また、『頓智一休さん』は、「わたしわ」という表音式仮名遣いを用いているが、この方式が実際使用されたのは、戦後すぐからしばらくの間で、先の13冊の内では他に3冊だからである。

さらには、この本の値段である。定価が10円と表示されている。赤本の値段について竹内は手塚治虫の「チャチで粗悪な、せいぜい十円程度の絵本を作っていた」<sup>24)</sup>という言葉を用いている。値段、体裁、内容などが手塚の例と符合している。

さて、作品の内容について述べる。これはほとんどが「一休話」を並べたもので、作者はあまり冒険していない。だが所々で漫画らしい動きのある表現を取り入れている。たとえば次のような場面が特徴的である。風邪薬の処方を一休に口外するなどの約束で教えた医者に対して、一休は高札を出して（口に出すのではなく）教える。抗議に来た医者を一休は、口外したのではないと投げ飛ばしてしまう。医者は「わしが悪かった かんべんして下さい」<sup>25)</sup>と謝るといふ場面である。

最期は殿様が「そのとんちで世の中を明るくしてくれ」と言って、ハッピーエンドとなる。

## (15) 第1章のまとめ

まず、ここに登場した作家たちがどのような作品を他に描いていたかを、主としてNDL-OPACにより検証しよう。

伊藤和三郎は、玩画社から他に「ポケット・マンガ」シリーズとして1946年に『お化け地蔵』、『キツネの馬さん』などを描き、また、翌47年に『怪少年の冒険』（中矢書房）48年『骸骨島の二少年』（洋々堂）などの冒険ものが中心となっていく。

カタビラ ススムは、戦前からの有名な漫画家で、この当時、『ピノチオの冒険』（1946年二葉書店）、『Oちゃんのぼうけん』（1947年 一元社）など冒険ものを中心に描いている。

根岸こみちは、『女王蛙とゆめ子ちゃん』（1948年、森の子供社）、『若草物語』（1951年、曙出版）など少女物が中心である。

清原ひとは、戦前からずっと子ども用の作品の絵を主として担当していた。たとえば、百田宗治著『花咲爺さん』（1949年、国民図書刊行会）、巖谷小波著『さざなみ童話』（1949年 ゆめのくに）などである。自著としては、『お山のこども』（1948年 泰光堂）などがある。

石田英助は1948年『大久保チョコ左衛門』（国民図書刊行会）、1949年『そろり珍左衛門』（鶴書房）を出すなど、ギャグ漫画の路線を歩んでいた。

竹田慎平は、1948年『悪魔の密林』（鷗友社）、1949年『怪奇島』（高和堂書店）等々、当時流行った冒険ものを中心に描いている。

この頃一休を取り上げた作家たちは、様々なジャンルを専門としていたことが分かる。必ずしも、頓知やギャグが専門ではなかったのである。

なぜ、いろいろな作家が一休を取り上げたのか。これには様々な理由が考えられる。

先に登場した竹内一郎は次のように言う。

「ストーリーマンガは今でも、『物語』よりも『主人公の造型』の方が大切なのである。マンガの世界では、業界の言葉で言うなら『主人公のキャラ（クター）が立っているか』が、最重要課題である。別の言葉で言うと、読者が主人公に感情移入できるかどうか、が一番大事なポイントなのだ」<sup>26)</sup>

確かに一休はキャラが立っている。少年だが大人に臆しないたくましさを持っている、あるいは時に失敗すれば、読者は親しみをもちやすくなる。

ストーリーを作ることも比較的容易である。そもそも頓知話の寄せ集めの様相を呈していたので、ショートストーリーをつないでいくことで、全体の展開を考えなくてもある程度のものは作れる。

以上の点は漫画向きである。既成の話をギャグ化して作り変える。あるいは、面白い話を途中に挿入していくなど自在に作る余地を持っているのである。さらに考えるべきは、一休の置かれている寺という場である。ここでは、一休という小僧と仲間と和尚が主要人物となる。舞台は居

住する寺であり、時には出かける外の世界である。寺には複数の小僧が出てきてそれを統括する和尚がいる。この構図は、生徒がいて先生がいるという学校と近似している。読者にとって身近な場なのである。この中で小僧＝生徒は比較的自由に、もちろん叱られつつ、悪戯が出来るのである。悪戯は漫画を面白くするための絶好の要素をなしている。

一休は、これまで違うジャンルを中心としていた漫画家にもとっつきやすい題材だった。こうして一休はこの時代の漫画という場を得て、それまでに作られた定番を破り新しい展開を見せたのである。

さて、プラング文庫所蔵対象本が終わる1950年以降、一休の漫画本は公的な機関では保存されていないようである。これは出版されなかったのではなく、保存されなかったからと考えられる。安っぽい赤本は公的機関の収集対象外だったのである。検閲という表現の自由に敵対する制度が、捨てられてもおかしくない漫画の保存に大きな貢献をしたのである。いかにも皮肉な時代であった。

## 2 1953年から1959年の漫画本「一休話」

### (1) 福井英一の世界

保存されている一休の漫画の空白期を経て4年ほどの1953年、漫画としての一休が登場するのは、当時超売れっ子だった漫画家・福井英一による。ただ、主人公の名前は一休ではない。頓休とされている。頓休という命名は頓知の一休を短縮したものと考えてよい。この『頓休さん』、和尚に仕える小僧であること、兄弟弟子がいること、時に頓知を発揮するというシチュエーションは、それまでの一休像そのままである。さらに、絵はくりくり坊主のかわいい子になっていて、一休さんとはしか見えない。

構成は、それぞれの号が30コマほどのまとまった話となっている。主要登場人物は頓休と兄弟子の小僧・ポツ念、それに和尚さんである。その他、街の人々が随時登場する。この作品は福井の急死<sup>27)</sup>による打ち止めまで22回（このうち40巻2号<sup>28)</sup>だけは、全く同じ体裁だが「頓休さん珍騒動」と命名されている）続くが、ほとんどの回で二人が失敗し、トホホという感じで終わる。

頓知の成功は、和尚が豚をもらってきて頓休らに育てるよう言われたので、何とかしないで済む工夫はないかと思っていたとき、和尚が強がりを行っているが、実は猪を怖がっていることを知り、豚に猪の格好をさせて和尚を怖がらせ、豚を返すよう仕向ける話<sup>29)</sup>、怒って追いかけてくる侍から逃れるために、にわとりを買う籠（地面に伏せるスタイル）に雪をかぶせて雪だるまに見せるかけ、その中に隠れる<sup>30)</sup>など数例しかない。

編集部によると思われる頓休のキャッチフレーズは、第1回が「ゆかいな小僧頓休さん、だれにでもすかれる頓休さん」<sup>31)</sup>、第3回が「とんち小僧頓休さん、ゆかいな小僧頓休さん」<sup>32)</sup>、失敗

のキャッチコピーも「今月もまた、意外な大しっばい」<sup>33)</sup>、「今月も大しっばい！」<sup>34)</sup>など繰り返し強調されている。

全体として、ゆかいな小僧（たち）の失敗記となっていて「頓休さん珍騒動」と呼ぶのがふさわしい。なお、米沢嘉博の次の指摘はこの場合当たらない。

「なんにしても、主人公は笑われる対象ではなかった。カラ兵衛の豪快な笑いは読者と共にある笑いだったし、茶坊主まんじゅうがあんみつ姫を笑わせていたのだ」<sup>35)</sup>。

この物語が元の「一休話」から題材を得たと思われるものは、皆無と言ってもよい。ただ、話す仏像を操ると称する坊主の詐術を頓休が腹話術と見破る話は、幻術を使う山伏との対決という「一休話」<sup>36)</sup>と似た要素を持っている。

この間、福井は、40巻9号への執筆を止め、別冊付録として、『頓休とんち旅日記』を出す。この別冊は、出だして作者自らを漫画の中に登場させ、頓休とポツ念に旅に出るよう促すところから始まる。それも頓休が夢の中で佐々木小次郎と対決し、目覚めればその小次郎が門前に倒れている。現実の小次郎は、爆弾で狙われている殿を守る使命を帯びているが怪我のため動けず、頓休とポツ念が代わりに旅立つというものである。ここでは、旅立ちをいやがる二人に作者・福井英一がペンを突き付け、「ぐずぐずしていると インクつぼにもどしてしまうぞ」とおどす。それに対して頓休：「ポツ念さん かくごをきめましようよ」、ポツ念：「よし 別冊付録なんだから がんばるか」、頓休「毎号の失敗つづきをばんかいするいいチャンスです」<sup>37)</sup>という漫画に特徴的な技法を用いて滑稽さを増している。

この旅は、頓休の頓知で無事任務を達成することで完結する。敵に捕まったポツ念を助けるため、敵の注意を別の方向に向けて忍び込むとか、駕籠で間に合いそうにないので、車輪を取り付けるとかという類のもので、頓知自身に大した新鮮味はなく、展開に湧々感も少ないが、主人公・頓休らにとっては一応の名誉回復となっている。勇んで書き始めた割には奇抜な発想を得られなかったと評価できる。

なお、人気作家・福井が同時期描いていたものとして、柔道漫画『イガグリくん』がある。これは、イガグリくんというあだ名の柔道少年が卑怯な手段を取る、柔道少年や大人の空手家と争うという「正義を愛する熱血の男児」<sup>38)</sup>物語である。だが、相手がいろいろ姑息な手段を考えるとところや、投げられた者の様子などに笑いを取るところはあり、所々に小さなギャグが仕掛けてあると言える。代表的なものを3つ挙げる。

あわてて走ってくるものにバケツの水を飲ませると、バケツをのぞきこんだ子どもが、「あれメダカが三びきたりないや」と言い、水を飲んだ男が驚く<sup>39)</sup>。何人かの無法者を投げ飛ばすと、投げられた者が襟首を帽子掛けにひっかけられ宙づりになったり、サボテンに頭を突っ込んだりする<sup>40)</sup>。新聞配達をしていて、「猛犬あり注意」の札を見て、「あっ いたいた すごいブルドックだ」と追い払うと、その家の主人だった<sup>41)</sup>。

『頓休さん』を福井がどのような意図で描いたかを、ここで検証する。頓休さんは、一休を基に作られた人物であることは確かである。それは、先に述べたような設定などから見て取れる。だが、それは、一休という頓知の小僧の「頓知」と「小僧」などに依拠しただけであって、「一休」というそれまでの「話」は参考にしていない。福井は一休もどきを創作しただけであって、従来の一休像に改変を加えるという意図は持っていなかったのである。

では、なぜここで福井を取り上げたのか。それは、一休のおかれたシチュエーションの意味を考えるのに役立つからである。

先に見たように、一休を取り上げ描いた当時の漫画家は、従来の「一休話」に多様な要素を付け加えることで作品を作ることが可能であると考えたと思われる。ここに福井英一を置いてみる。福井にとって既成の「一休話」はもはや重要な意味を持たない。

福井は、先に見た擬似学校空間としての寺と周辺（ここでは「街」である）の中で、小僧和尚の悪戯、頓知、失敗を自由に描けたのである。

ただ、福井の構造の欠点は、生徒役が2人しかいないことである。生徒間に生じるはずの「面白い」出来事は、その多くを外に求めざるを得ないからである。

私は先に「頓知」という観点を提示した。だがこの点についていささか極論に見えるかもしれないが、面白さを追求する作家という見地からは、もはや頓知すら不可欠ではない。ドタバタや悪戯や失敗談がストーリーを支える重要な柱となる。『頓休さん』は、パラドクシカルだが、「頓知」の影を薄くしたのである。

よく考えてみると、このことは戦後の一休を描いた漫画家たちが、所々で実行していたことである。ただ福井は、意識してか、せずにか、公然とそれを行った。それは、「一休」と名乗らないことで「一休話」から解放された故であった。

## (2) 伝記としての一休漫画

この頃以降、伝記として描かれる一休話が表舞台に登場した。1952年偕成社は、2冊の伝記本を出版する。「偉人物語文庫 第2期」として山本和夫『警世の名僧 一休禅師』、および「世界偉人伝全集」として桑田忠親『一休禅師』である。

伝記として一休が取り上げられるということは、戦前の『少年一休禅師の生涯』<sup>42)</sup>、『少年講談一休和尚』<sup>43)</sup>などに倣って、少年時代、青年時代、成人と物語が進む体裁がとられたということである。こうなると、物語展開の自由度は著しく低下する。それまでは、極端に言えば一休が登場しさえすればよかったので、どんな話が出てきても許容範囲となる。『一休さんの冒険』のように、盗まれた経を探す旅に出ても、一休はこう生きた、あるいはこう語られたと事前に知っている者以外には、そう違和感はない。また、1945年の『頓智一休』のように、ほとんどドタバタで、頓知話が最後にしかないものも、タイトルとの差に気付かなければ、問題とならない。

だが伝記となると、「成長」という枠が課せられる。主人公は「偉い人物」とされるので、失敗の主役にはそうそうなれない。作家に許されるのは、数多くあるエピソードからどれを取り上

げるかの選択、あるいはその解釈の変更による雰囲気の変更、ギャグの創造などに限定される。漫画など描いていられない時代の到来、と言うと皮肉が効きすぎか。

しかし、描くのは癖のある「漫画家」である。制約を受けつつも自己主張はなされた。

(i) 中村ひろし（裕）『一休さん』

この作品は、1953年11月5日泰光堂から「伝記まんが」として出版されている。一休が僧になるきっかけは、「りっぱな坊さんになれば世の中も少しは平和になる」<sup>44)</sup>と母に勧められることによる。この話は、一休が敗北した南朝系の母を持つことを前提に作られているのであるが。また、将軍の前で「私は仏の道に入ったものです。〔中略〕平和を守ります」<sup>45)</sup>と決意を表明した通り、「いばらの道」を歩む僧として描かれている。

このような観点から、頓知を使って金持ちや将軍に貧しい人のことを考えるよう説教するなど「世のため」に生きたというストーリーとなっている。

ただ、小僧時代には、剣術稽古をするドタバタや、次のような楽しい場面も登場する。落ち葉をいっぺんに片付けようと犬にそりを付けるが、途中で犬が猫とけんかしてしまい、制御不能になる。これを見ていた和尚が「一休のいたずら者めっ どこへ行く！」と叱るが、一休は「和尚さま どこへいくか 犬にきいて下さいよう！」と落語・「素人鰻」と同様の落ちとなっている。いくらかギャグはあるが、基本的には、正統な伝記話となっている。

(ii) 中島菊夫『一休さん』

この作品は、1954年5月1日、東京漫画出版社から「伝記漫画文庫」として出版されている。最初の「この物語について」で中島は次のように言う。

「頓智で名高い一休さんは、〔中略〕生まれつきまがったことが大きらいで、自分の信念のためには何者をも恐れぬ人でした。そして乱れた世の中のあさましさをなげいて、ひたすら修行をかさね、不安におののく民衆の心を救うことにつとめました」

内容はほぼこの線となっている。最後は、一休が骨董を珍重する将軍に偽者を高価で売りつけることで将軍をいさめ、貧しい人たちに食べ物配って感謝され、拜まれるという大団円となっている。

ただ話の展開の中でギャグが結構駆使されている。和尚が饅頭を食べているのを小僧たちが見つけると、これは「ねずみとりの どくいりまんじゅうだよ」<sup>46)</sup>と誤魔化されたので、自分たちの顔にばんそうこうをはり、「ねずみが いて こんなに かおを ひっかかれました」「たいじするから ねずみとりの どくまんじゅうをください」<sup>47)</sup>と言って和尚を参らせる。

あるいは、寺が預かった将軍義満の茶碗を割ってしまい、呼び出されたときも一休は極めて生意気な態度を取る。まず家来との間で次のような、今から見ればかなりベタなやりとりがある。

一休「ちょっとおっさん」、家来「おっさんとはなんだ」、一休「わなかったね きみ おばさんなの」<sup>48)</sup>。

さらに義満にも痛烈な言い方をする。「ちゃわんを こわす たんびに にんげんの いのちをとられて たまる もんか ちゃわんが だいじか にんげんが だいじか。義満のおっさん あんたはん あほかいな」。これに対して、家来は刀を振り上げるが、義満はあっさりと「一休 よくいってくれた わしが わかった ゆるしてくれ」と答え、一休は、「それで いや おちゃわん わってすみません」と、にこやかに謝る。

漫画が許す非現実的な言葉と、団円を求める思想が調和させられている。

大人になると、世の中のために貢献したことが強調される。「菓の作り方を知り、製造者が口外するなど言うのを破って広げた話」、「將軍をいさめて民衆の負担を減らす話」等々である。このような世のために生きた名僧という像は、講談が盛んだったときに強調されたもので、それを確実に継承していると言える。

漫画に特徴的なギャグも所々に見られる。たとえば、次の例を楽しめる。一休は丹波の金持の葬式を頼まれる、そこで日当付きのお供を連れて行ってよいとの了承を得て、多くの貧しい人たちを伴うという有名な「一休話」が紹介される。ここでは日当を巡って次のようなやり取りがされる。侍「おまえさんには いまさっき やったじゃないか」、一休のお供「えへへ かおはにてるが さきのはあにきでさあ」、侍（別の男に対して）「あんたはとなり村のしゅうだろう 京からのおともじゃあるまい」、隣村の男「とちゅうからだから はんがくにまけとくよ」

よくありそうなギャグだが、この作品の性格をよく表している。

### (iii) 東村登『とんち一休さん』

この作品は、1954年8月15日集英社から「世界伝記長編漫画」として出版されている。一休の小僧時代にはじまり、青年期の苦しい修行を経て、大人になってからは、自らの権威を利用して、民衆の貧困を感じない將軍などの権力者などを諷めたり、貧しい者の力となる行動を取ったりする世のために生きる僧の姿を描いたものである。

また、所々ギャグが顔を出すという点で他の伝記作品と共通している。

ギャグをいくらか紹介する。一休（当時は、千菊丸）が入門するとき、乳母に連れられて来るが、いやがって逃げようとして和尚を怒らせ、追いかけることになる。和尚がようやく「つかまえた さあ こいっ<sup>49)</sup>」という、握っていた手は乳母のものだった。一休は逃げて木に登ったが、他の小僧に饅頭をやるからと言われ下りてきて、虫取り網で捕まる。

義満に会う場面では、かなりふざけている。義満「もっとこっちへ いらっしゃい」、一休「いいですか では……」次のコマ：一休、近づいて「ばあっ」と舌を出す。義満（驚いて）「うひひひ」次のコマ：義満「うっははは おもしろいやつじゃ」、一休「はっはは おもしろいのさまだ」<sup>50)</sup>

一休が禅僧・華叟に弟子入りを希望して追い払われ続けるという深刻な場面でも、華叟の弟子

とのやり取りが次のように展開される。弟子「また きたのですか だめですよ」、一休「そうですか あしたきます」。次の日：一休「こんにちわ だめですか」、弟子「だめです（太字で）。次の日：一休「おはようございます」、弟子「うわっ またきたっ」（耳を押さえて跳びあがる）。次の日：弟子「きょうもきた これじゃ しんけいすいじゃくになる えい！」（「だめです」と太く書いた紙を差し出す）、一休「ありゃ」。次の日：弟子「やれやれ きょうは こないらしい」、一休（物陰から）「うっふふ いまに おどろくなよ」、次のコマ：一休が物陰から、長い棒の先に「おねがいします」と書いた紙をつけたものを差し出す、弟子「キー」と言いながら跳びあがる<sup>51)</sup>。

可能な所ではふざけた感じを出そうと努めているのが、はっきりと表わされている。

#### (iv) 松沢のぼる・漫画 山本和夫・立案並びに指導『一休禅師』

この作品は、1959年集英社から「学習漫画文庫 偉人物語編」として出版されている。内容は一休の既成の伝記を踏襲している。頓知の小僧時代、青年期の厳しい修行、成人後は世のために尽くした偉い禅師というように。

全体として、まじめに生きていく僧というタッチで描かれている。それは、すでに一休の伝記<sup>52)</sup>を書いている山本和夫の立案だからであろう。松沢は次のような所でわずかに自己主張しているように見受けられる。

一休が華叟に弟子入りを頼む場面で、ようやく許されて弟子入り認められたとき、一休はそのまま雪の中に倒れる。一休「ふが ふが ふが……」華叟「おい、おい、いったいどうしたことだ」。次のコマ：華叟「こりゃ、足がしびれて、立てぬかい。はっははは」  
次のコマ：華叟「せわのやけるやつじゃ、それよいしょ」（助け起こす）。次のコマ：華叟「こりゃ、何だい。ぼうずじゃなくて、雪だるまじゃないか。はははははは……」、一休「はははははははは……」<sup>53)</sup>

ここで、以上の作家の他の作品の紹介をしておく。中村ひろしは、『Pちゃんの冒険』（1948年 少年の友社）『大笑いとりもの』（1949年 少年の友社）などを出している。ギャグを取り入れたものが得意のようである。

中島菊夫は、金の星社などから、『コロコロ太郎』シリーズを中心に描き続けている。

東村登は、『悪魔の牙』、『幻の殺人鬼』（共に1957年 中村書店）などの冒険ものを描いている。

松沢のぼるは、別の作家の絵を担当することが多い。自著としては『謎の第七島』、『姿なき犯罪』（共に1957年 中村書店）という推理物を出している。

ここでも、多分野の作家が一休を描いていた。

以上、伝記としての漫画一休を見てきた。伝記を人物の顕彰ではなく、正確な歴史の一部にしようと言う主張<sup>54)</sup>もあるにはあったが、結局は顕彰色を免れ得ない。そもそも伝記に取り上げ

る人物は「偉い人」であるからである。だが、漫画にはある程度の逸脱は許される。前者を象徴するのが、事件を権威で解決する講談の名僧であり、後者を象徴するのが、失敗し、冷や汗をかく小僧である。伝記漫画はこの2つの面をあわせもっていたのである。

### (3) 伝記以外の一休漫画

もちろん、伝記以外の漫画も世に出された。以下の3編が現在閲覧できたものである。

#### (i) 若月てつ『とんちの一休さん』

この作品は、1956年6月1日『小学二年生』第12巻第3号付録として刊行された。部分的には有名な「一休話」をいくつか取り入れているが、ストーリーは大きく異なる。寺に入り仏像を盗んだ泥棒が捕まるとき、実はあげたのだと言うことで改心させた泥棒が、その後豪傑となって、一休を助け、將軍をいさめるというものである。また、登場人物として、「力じまんの力ねん」という仲間の小僧や、「なつめちゃん」(後のアニメ「一休さん」に登場するさよちゃんのモデルかもしれない)という一休ファンの女の子を登場させている。ただ「毒入りの飴」が少し改変されて独立した1話となっている点などに既成の「一休話」との近さを感じさせる。

若月は、一休を離れない要素を残した上で、全く違う展開にしたかったのではないと思われる。その意味では、戦後5年間の一休と似た性質を持っている。

#### (ii) 東村登『とんち一休さん』(第2集)

東村は先の『とんち一休さん』で書き残した部分があったと思われる。1957年10月10日、改めて『とんち一休さん』(第2集)を出す。ここでは、一休は最期まで子どもであって、伝記とはなっていない。したがって、一休の権威にとらわれずにギャグを提供できる構造になっている。

前半は小僧時代で、たとえば將軍の茶碗を預かり割ってしまう話では、そのことを聞いたお和尚が跳びあがって気絶し、あわてて將軍に伝えに来るが、將軍もひっくり返って頭から落ちてしまうことになる。

後半で東村は、ストーリーを破天荒にするため、一休を修業に出すが、お供するのは力兵衛という人並みはずれて強い侍である。ギャグは力兵衛が相手を吹っ飛ばすのや、強そうな山伏が子どもを泣き止ませるため舌を出して「おっぺけ ぺけぺけの ぺけぺけ」とあやすなど多彩になっている。

#### (iii) 茨木啓一『一休さん』

この作品は、雑誌『小学二年生』1959年2月号の付録だが、面白いストーリーになっている。ガキ大将に、こわれた桶で水を汲むよう命じられた一休は、たがをフラフープにして遊ぶ。それを見た子どもたちが「ぼくにもやらせておくれよ」<sup>55)</sup>と頼むので、「水を 一ぱいくんで 来た

子に「やらせてあげる」<sup>56)</sup>とトムソーヤ方式で自分は働かないという頓知を働かせる。その後、既成の「一休話」も取り入れつつ、新たなクイズ、頓知を披露する。

たとえば、誤って水をかけたので怒って寺に来た武士に対して、大入道のような影絵を見せ、裏庭で大きな石を地面に叩きつけ、下駄屋で借りた看板の大きな下駄を玄関に置いて、大男がやって来たように見せて追い返す工夫をするなどである。

ほとんど既成の話にとらわれないで、一休を描いている。

以上の作家についてみると、若月てつは後に自然科学物中心に絵を描いている。

茨木啓一は、低学年向けがほとんどで、『こみみちゃん』（1954年 講談社）などを描いている。

#### (4) 第2章のまとめ

福井作品と伝記をめぐって一休マンガを見てきた。福井については「一休話」の一つとして考えられる理由をのべた。伝記については、伝記とそれ以外の作品の差は認められよう。伝記であってそうでなくても、小僧時代は大差ない。失敗をやらかすいたずら小僧でも、頓知にたけた小僧でもかまわない。だが、伝記の場合は、後との接続が問題となる。苦しい修行を経験するなどして成長し、最後に名僧となる。この名僧は、ふざけていてもよい。だが、問題解決のために多くの場合、禅師としての権威を明らかにしなければならない。あるいは世のために生きるという目的を実現しなくてはならない。この際には、一休はふざけていられない。

だが、漫画である。一休が突如（でなくてもよいが）ギャグを披露することは予想されるうちに入っている。伝記とそうでない一休話とは、基本的には相いれない部分を持ちながらも、漫画家が料理することで、時にはテイストの似通った面白さを発揮できたのである。

#### おわりに

本稿では、漫画の「一休話」を扱ってきたが、漫画の一休がその後の一休像形成にどれだけの影響を与えたか、明らかにしたいところである。だが、現在の段階ではあまり肯定的な材料がない。たとえば、時代が下がり、1975年から1982年の長期間にわたって、東映動画制作のアニメ『一休さん』が放映された。だが、そこでの一休像は、まじめで、悲しみを背負ったというもので、ここに登場した漫画とはかなりの距離がある。

戦後解放されたように見えた漫画一休はいったいどこにいったのだろうか。

## 注

- 1) 『国際児童文学館紀要』第二十六号(二〇一三年三月)
- 2) 『手塚治虫=ストーリーマンガの起源』講談社 2006年 p28
- 3) なお、これはNDL-OPACでは、出版年不詳となっているが、現物に極小さい文字で出版年が記されている
- 4) 原文カタカナ。以下この作品では同様。なお、ページの記載はない
- 5) 原文カタカナ。以下この作品では同様。なお、ページの記載はない
- 6) 原文全カタカナ。以下同様
- 7) 原文カタカナ
- 8) 前掲・竹内一郎『手塚治虫=ストーリーマンガの起源』講談社 2006年 p59
- 9) 夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』(ミネルヴァ書房 2009年 p25)の宮本大人執筆部
- 10) 山本武利『GHQの検閲・課報・宣伝工作』岩波書店 2013年
- 11) 冒頭の「みなさんへ」
- 12) 根岸こみち『頓知くらべ一休さん』p18
- 13) 同上 p32
- 14) 寛文8年『一休咄』巻1-1
- 15) なお、『手塚治虫=ストーリーマンガの起源』は、この時代を次のように言っている。「漫画は、芸術ではなく、『商品』と考えられていた。だから、模倣することにネガティブな意識がない」(p26)
- 16) 『名古屋女子大学 紀要』57(人・社)2011年
- 17) 石田英助『とんち小僧一休さん』p3
- 18) 同上 p4
- 19) 同上 p47
- 20) 石田英助『一休和尚さん』p18
- 21) 竹田慎平『一休さん』p2
- 22) 同上 p53
- 23) 2013年9月10日付の筆者への回答
- 24) 前掲『手塚治虫=ストーリーマンガの起源』p49。『手塚治虫自伝』『手塚治虫マンガ全集 別巻1 手塚治虫エッセイ集①』講談社 1996年 p67より重引
- 25) 作者不明『頓智一休さん』p26
- 26) 前掲『手塚治虫=ストーリーマンガの起源』p22
- 27) 執筆過多のためとされている。「亡くなる前日まで、旅館にカンヅメにし、書いていただいた」との証言が残されている。平田昌兵「そして流れが変わった」(『少年漫画劇場』第9巻 筑摩書房 1971年)所収 p304
- 28) 1953年新年増刊号
- 29) 『少年クラブ』40巻13号=1953年11月
- 30) 同上41巻3号=1954年2月
- 31) 同上40巻1号=1953年1月 p26 欄外
- 32) 同上40巻4号=1953年3月 p36 欄外
- 33) 同上40巻3号=1953年2月 p46 欄外
- 34) 同上40巻7号=1953年6月 p40 欄外
- 35) 米沢嘉博『戦後ギャグマンガ史』筑摩文庫 2009年
- 36) 前掲『一休咄』巻2-7

- 37) 『頓休とんち旅日記』 p 13
- 38) 『イガグリくん』復刻の『漫画名作館』1994年 アース出版局 p 206。また「佐藤紅緑の熱血小説を漫画にする」との福井の言葉が、平田昌兵「そして流れが変わった」(前掲『少年漫画劇場』第9巻 p 305)で紹介されている
- 39) 前掲『イガグリくん』 p 26
- 40) 同上 pp 184~5
- 41) 同上 p 214
- 42) 松本浩記著 大同館書店 1932年
- 43) 大日本雄弁会講談社編 同社刊 1936年
- 44) 中村ひろし『一休さん』 p 9
- 45) 同上 p 47
- 46) 中島菊夫『一休さん』 p 12
- 47) 同上 p 14
- 48) 同上 p 44
- 49) 東村登『とんち一休さん』 p 4
- 50) 同上 p 37
- 51) 同上 p 61
- 52) 山本和夫『一休禅師：警世の名僧』偉人物語文庫 47 偕成社 1953年
- 53) 松沢のぼる・漫画 山本和夫・立案、指導『一休禅師』 p 74
- 54) たとえば、教育技術連盟編『伝記による社会科新単元の展開』小学館 1956年
- 55) 茨木啓一『一休さん』 p 7
- 56) 同上 p 8

#### 《謝 辞》

この論文を書くに当たり、国立国会図書館・国際子ども図書館、および大阪府立中央図書館国際児童文学館に資料利用、文献調査などたいへんお世話になりました。深く感謝いたします。

